

# 学習をめぐる うれしい変化と心配な変化

青山学院大学教授 樋田 大二郎

小学生の学習を振り返ると、過去25年の間に、①家庭（学校外）では、学習時間が増え（量的向上）、自発性や主体性、計画性などが高まっている（質的向上）。②学校では、授業の内容と方法が、新しい学力観やアクティブ・ラーニングが唱える方向に変化し、これと並行して小学生の授業適応や関心・意欲・態度が向上した。③しかしながら小学生の社会観・将来観と勉強の効用観、成績観・学力観に競争主義的傾向と功利主義的傾向が強まっている。

## 1 家庭学習の量と質の向上

学校外の学習時間の平均値は2001年調査の71.5分を底にしてV字回復。2015年調査は95.8分と過去最長となった。宿題にかかる時間の増加がV字回復の要因の1つだが、背景には近年の宿題指導の丁寧化と宿題内容のアクティブ・ラーニング化が考えられる。家庭学習の質的側面は、近年だけでなく25年間を通じて、自発的、主体的、計画的なものに変わってきた。

### (1) V字回復した学習時間

25年を振り返ると、2001年調査までいったん減少した学校外の学習時間が再度増

加して2015年調査では過去最長となった。

平日の学校外の学習時間の平均は、1990年調査が87.2分であったが、1996年調査では77.9分、そして2001年調査では最短の71.5分となった。その後、V字回復して2006年調査では81.5分、2015年調査では95.8分と過去最長となった。2001年調査と2015年調査の差は24.3分となっている。

われわれの調査から、学校外の学習時間の増加の理由の1つに、宿題にかかる時間の増加が考えられる。宿題の時間は2006年調査と比べて2015年調査は大きく増加した（宿題の時間は2006年調査以降たずねている）。宿題の時間と、それが学校外の学習時間に占める割合は2006年調査が36.4分、44.7%、2015年調査が49.8分、52.0%であった。

### (2) 家庭学習の内容の変化

宿題にかかる時間が増加した背景には、宿題指導の積極化と宿題内容のアクティブ・ラーニング化が考えられる。小学校では「学びのすすめ」（文部科学省 2002）の頃から、積極的な家庭学習指導と宿題指導が広がり、この結果「出された宿題をきちんとやっていく」という質問に対して「あてはまる」と答えた割合が1990年調査から2015年調査まで、56.9% → 55.9% → 61.4% → 60.8% → 71.3%と増加した。特に2006年調査から

2015年調査にかけての変化は10.5ポイントと大きな上昇になっている。

また、2015年調査でたずねた宿題の内容を見ると(表1-1)、週1回と週2回以上の合計で、従来型の宿題のイメージである「プリントやドリル」が90.0%と高い値であったが、それに加えて近年のアクティブ・ラーニングの傾向を反映して、「調べ学習」が43.8%、「自学ノートなど自主的な学習」が76.2%と広がりを見せている。こうした変化が宿題にかける時間に影響しているものと考えられる。

### (3) 家庭学習の方法の変化

家庭学習の質的側面の変化は近年だけでなく、25年間を通じて自発的、主体的、計画的なものに変わってきた。われわれ大人は小学生に対しては、良い成績をとることや長時間の勉強をすることと同じくらいか、あるいはそれ以上に自発的で主体的、計画的な学習

習慣や学習態度の形成を重視する。調査結果が示すところでは、25年間を通して、それらは向上している。

表1-2をみると、「予習をしてから授業をうける」「授業で習ったことを、自分でもっとくわしく調べる」「きれいな科目の勉強もいっしょうけんめいする」「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」などの自発性や主体性にかかわる項目ではそうした傾向が顕著である。

## 2 授業内容・方法の変容と小学生の授業適応化

授業理解と教科の好き嫌いについては2006年調査から2015年調査にかけて大きな変化がみられる。まず、国・社・算・理4教科のいずれも理解度が大きく上昇した。また、4教科を好きな割合も高まっている。続いて、新しい学力の要素である興味・関心に

表1-1 宿題の内容 (小学生、2015年) (%)



|               | 週2回以上 | 週1回  | 月に1・2回以下 |
|---------------|-------|------|----------|
| プリントやドリル      | 80.0  | 10.0 | 9.2      |
| 自学ノートなど自主的な学習 | 60.0  | 16.2 | 22.9     |
| 調べ学習          | 25.0  | 18.8 | 54.9     |
| 作文            | 13.2  | 23.0 | 62.8     |

注) 「週2回以上」は「週4日以上」+「週2〜3日くらい」の比率、「週1回」は「週1日くらい」の比率、「月に1・2回以下」は「月に1〜2回くらい」+「年に数回」+「ほとんどしない」の比率。

表1-2 家庭学習の様子 (小学生、経年比較) (%)

|                              | 1990年 | 2001年 | 2015年 |
|------------------------------|-------|-------|-------|
| 授業で習ったことを、自分でもっとくわしく調べる      | 35.7  | 54.8  | 72.8  |
| 予習をしてから授業をうける                | 43.8  | 52.8  | 64.4  |
| きれいな科目の勉強もいっしょうけんめいする        | 71.2  | 80.1  | 87.0  |
| 家族に言われなくても自分から進んで勉強する        | 67.8  | 77.6  | 83.8  |
| 授業で習ったことは、その日のうちにふく習する       | 46.0  | 47.5  | 65.5  |
| 机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる          | 63.8  | 63.7  | 75.7  |
| 計画を立てて勉強する                   | 57.0  | 56.9  | 73.5  |
| 自分できょうみを持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる | 62.3  | 63.4  | 73.2  |
| 出された宿題をきちんとやっていく             | 90.1  | 94.6  | 95.9  |
| ラジオやテレビをつけっ放しで勉強する           | 43.3  | 45.9  | 45.0  |

注1) 「あてはまる」+「まああてはまる」の比率。

注2)  は10ポイント以上の増加、 は5ポイント以上10ポイント未満の増加、 は2.5ポイント以上5ポイント未満の増加を表す。

については、質問項目を入れた1996年調査から2015年調査に至るまで、国語、社会、算数、理科の各教科でほぼ右肩上がり、「すばらしい／ふしぎだと感じる」「考えるのが好き／調べるのが好き」などの興味・関心が高まっている。最後に、2015年調査では、アクティブ・ラーニングや課題解決型学習の経験率やそれらを好きだと答える割合が高い。

データを読み進める前に、「新しい学力観」「確かな学力」をめぐる25年間の変化を、カリキュラムの歴史の中に位置づけてみよう。

①臨時教育審議会（1984～1987）からスタートしよう。臨時教育審議会では画一的な教育が批判され、教育の自由化の議論を経て最終的に「個性重視」が提唱された。この当時の小学5年生の年間総授業時数は1,015時間であった。

②1989年告示学習指導要領では、詰め込みや教え込みとは決別することが企図され、「新しい学力観」と「個性尊重」が提唱された。1990年代の小学校の授業では「新しい学力観」の関心・意欲・態度と個性重視が唱えられた。小学5年生の総授業時数は1,015時間であった。

③2000年代は1998年告示学習指導要領の「生きる力」と「学力向上」という一見矛盾する2つのベクトルが「確かな学力」の名のもとに同時並行で提示された（「学びのすすめ」（2002年））。「確かな学力」は「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたもの」（※下線は筆者）であり、基礎・基本と活用・探究の両者の学力の形成が求められた。全国の小学校の現場が旧来の学力と新しい学力を同時に育てるという課題にチャレンジした。1998年告示学習指導要領では完全学校週5日制とな

り、「総合的な学習の時間」が創設された。小学5年生の総授業時数は945時間であった。

④2008年告示学習指導要領では「確かな学力」の学力観が整理され、「習得」「活用」「探究」の3つの学力が相互に影響する包括的な学力として図式化された。「総合的な学習の時間」が削減され、「外国語活動」が創設された。小学5年生の総授業時数は980時間であった。

⑤直近の動向は、中央教育審議会の教員養成部会の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」（2015年）という長いタイトルの答申の中に読み取れる。同答申には教育方法の改善の重要性が唱えられ、とりわけ「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる『アクティブ・ラーニング』）」が注目されている。

われわれの調査は、上記のカリキュラムの動向を踏まえて、1996年調査以降、関心・意欲・態度についての調査項目を加え、2001年調査以降は授業方法も調べてきた。また、2015年調査についてはアクティブ・ラーニングにかかわる授業方法の実施状況を調査項目に加えている。

#### （1）授業の理解度は過去9年間で向上した

「ゆとり」とよばれるカリキュラム改革の背景の1つに、七五三と言われた「落ちこぼれ」の問題（小学生の3割、中学生の5割、高校生の7割が落ちこぼれると言われた）に対する危機感があった。表1-3は、国・社・算・理の4教科を抜粋して、児童の理解度の変化をみたものである。1990年調査から2006年調査までは、全体として理解度が高まる方向の中で、教科ごとには個々に上下したり小さな変化にとどまったりしたが、

2006年調査から2015年調査にかけては国・社・算・理の4教科ともに理解度が大きく上昇した。

## (2) 教科の好き嫌い

教科の好き嫌いをみてみよう。関心・意欲・態度が高まるためにはその教科が好きであること（あるいはその逆の関係も）が重要である。国・社・算・理の4教科を抜粋して、調査結果をみてみよう。表1-4で、上述の「理解度」に並行して、2006年調査から2015年調査にかけて国・社・算・理の4教科を好きな割合が高まっている。

また、表にはしなかったが、「音楽」「図画工作」「体育」「家庭」「外国語（英語）活動」「総合的な学習の時間」を加えて、2015年調査の教科・活動を好きな割合の順位を見ると、1位が「家庭」（90.2%）、2位が「図画工作」（86.5%）、3位が「体育」（83.1%）

の順になっており、「家庭」「図画工作」「体育」の好きな割合が高い。4位は新しく加わった「外国語（英語）活動」（77.6%）、5位は「理科」（75.2%）、6位は「総合的な学習の時間」（74.4%）、7位が「音楽」（71.5%）。これらに対して国・算・社は好きな割合が低く、8位が「算数」（68.4%）、9位が「国語」（58.5%）、10位が「社会」（55.6%）となっている（図1-1-1、p.55）。

この結果からは、「国語」「社会」「算数」は、理解度や好きな割合が改善されつつあるが、まだ多くの小学生が週に何時間か嫌いなことを強いられていることになる。しかし、表は省いたが、われわれの調査結果では、新しい学力観の質問項目を入れた1996年調査から2015年調査に至るまで、「国語」「社会」「算数」「理科」の各教科ではほぼ右肩上がりですばらしい／ふしぎだと感じる」「考えるのが好き／調べるのが好き」などの興味・関心が

表1-3 授業の理解度（小学生、経年比較） (%)

|           | 1990年 | 1996年 | 2001年 | 2006年 | 2015年 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 国語        | 62.9  | 67.0  | 71.2  | 70.8  | 76.1  |
| 社会        | 54.5  | 56.5  | 61.5  | 64.3  | 72.0  |
| 算数        | 62.4  | 60.3  | 69.1  | 73.9  | 77.9  |
| 理科        | 70.5  | 71.3  | 72.6  | 77.0  | 82.3  |
| 外国語（英語）活動 |       |       |       |       | 73.4  |

注）「ほとんどわかっている」＋「だいたいわかっている（70%くらいわかっている）」の比率。

表1-4 教科の好き嫌い（小学生、経年比較） (%)

|    | 1990年 | 1996年 | 2001年 | 2006年 | 2015年 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 国語 | 52.2  | 61.0  | 54.7  | 53.4  | 58.5  |
| 社会 | 50.9  | 51.4  | 49.6  | 48.0  | 55.6  |
| 算数 | 51.8  | 53.1  | 55.6  | 62.8  | 68.4  |
| 理科 | 71.4  | 71.3  | 68.2  | 68.5  | 75.2  |

注）「とても好き」＋「まあ好き」の比率。

表1-5 多様な授業方法の経験（小学生、2015年） (%)

|                                 | 2015年 |
|---------------------------------|-------|
| ①どのように調べればよいかを考える               | 81.4  |
| ②テーマについてグループで話し合う               | 80.5  |
| ③観察・実験や調査などで考えを確かめる             | 76.7  |
| ④グループで活動をふりかえって何が良かったか悪かったかを考える | 63.5  |
| ⑤インターネットを使って何か調べる               | 63.2  |
| ⑥自分の考えを図表や写真などを使って表現する          | 62.1  |

注）「よくする」＋「時々する」の比率。

高まっている（図4-4-1、p.139）。「嫌いなこと」からの解放は、従来からの「新しい学力観」の努力と近年の新しい授業方法の努力の行方にかかっている。

### (3) 多様な授業方法の経験

上で整理したように、カリキュラム改革は内容の改革に加えて方法の改革、とりわけアクティブ・ラーニング的な方法の導入へと進んでいる。そして、現場ではすでに発展学習や探究学習の文脈で授業方法の改革が先取りされている。表1-5は、新しい授業方法導入の観点から小学生の授業方法の経験率を抜粋した。小学生は、かつてのチョーク・アンド・トーク（教師が説明して要点を黒板に書く）の時代とは異なり、②グループで話し合ったり（80.5%）、④活動を振り返ったり（63.5%）の経験をしている。また①調べ方を考えたり（81.4%）、③観察などで考えを確かめている（76.7%）割合も高い。また、⑥図表や写真で表現することや、⑤インターネットの利用も進んでいる。

### (4) 新しい授業方法の好き嫌い

続いて、小学生が新しい授業方法をどのようにみているか、好き嫌いの観点から調べてみた。アクティブ・ラーニングや課題解決型学習とかかわりのある項目で好きだと答える割合が高くなっている。表1-6で、アクティブ・ラーニングや課題解決型学習とかかわりのある項目では、「学校外のいろいろな場所に行ってする授業や調査」が2001年調査→2006年調査→2015年調査の順に86.9%→84.6%→89.2%、「友だちと話し合いながら進めていく授業」が同じく81.8%→81.0%→86.0%といずれも2006年調査から2015年調査にかけて上昇している。「パソコンやタブレットを使ってする勉強」が好きな割合は91.3%→91.1%→90.7%と、非常

に高い割合を保っている。

なお、「先生が黒板を使いながら教える授業」が2001年調査から2015年調査まで84.8%→82.7%→86.0%と、2006年調査でいったん減少して2015年調査で再び上昇した。背景には、黒板を使いながらする授業が「教科書の説明を聞く」授業から、「教科書を使って」黒板で一緒に考える授業や子どもが表現する授業へと変化していること、黒板が書く場所から貼り付けたり、映写したりする場所に変化してきたことがあるかもしれない。

---

## 3 小学生の意識の競争主義化と功利主義化

---

25年間で、学歴やお金、一流の仕事で幸せになれると答える割合が大きく増加している。また、この9年間では、小学生の勉強の効用観に学歴主義的な傾向が強くなっている。そして、こうした勉強の効用観の変化は、学校生活の中での勉強の比重が高まるという成績観・学力観の変化を伴っている。

### (1) 社会観・将来観

小学生の幸福観が学歴主義的、拝金主義的、一流志向的な方向に向かっている。

25年前の1990年調査との比較で、2015年調査では、人間関係を重視する社会的風潮の中で「いい友だちがいると幸せになれる」がもともと高い値であったのがさらに7.6ポイント増加して93.8%と高い値になっている（表1-7）。しかし、同じく競争主義や格差社会の社会的風潮の中で、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」が59.3%→78.1%、「お金がたくさんあると幸せになれる」が47.4%→57.5%、「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」が59.0%→70.8%と、学歴やお金、一流の仕

事で幸せになれると答える割合が大きく増加している。

## (2) 勉強の効用観と学歴観の変化

この9年間で、小学生の学歴主義的な勉強の効用観が強くなっている。

上述の社会観・将来観の変化とともに、表1-8で見られるように、勉強の効用観の変化が起きている。勉強の効用観の質問は、2006年調査と2015年調査で質問しているが、この9年間で「一流の会社に入るために」が80.4%→85.2%へ、「会社や役所に入っただけでえらくなる（出世する）ために」が69.7%→79.3%へ、「お金持ちになるために」が47.8%→57.8%へと、およそ5ポイントから10ポイントの増加となっている。

こうした勉強の効用観の変化は、学校生活の中での勉強の比重が高まるという成績観・学力観の変化を伴っている（表1-9）。成績観・学力観の質問は2001年調査、2006年調査、2015年調査の3回質問している。

「学校生活が楽しければ、成せきにはこだわらない」が2001年調査から2015年調査の14年間で35.4%→30.3%→21.2%と14.2ポイントも減少している。同じように、「そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう」も15.1%→8.1%→5.0%と10.1ポイント減少している。

これに対して、勉強の効用を高めるために努力したいという意見は、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成せきを上げたい」が67.0%→67.8%→74.6%と、2001年調

表1-6 好きな授業方法（小学生、経年比較） (%)

|                           | 2001年 | 2006年 | 2015年 |
|---------------------------|-------|-------|-------|
| 先生が黒板を使いながら教える授業          | 84.8  | 82.7  | 86.0  |
| パソコンやタブレットを使ってする勉強        | 91.3  | 91.1  | 90.7  |
| 学校外のいろいろな場所に行っただけでする授業や調査 | 86.9  | 84.6  | 89.2  |
| 友だちと話し合いながら進めていく授業        | 81.8  | 81.0  | 86.0  |

注) 「とてもすき」 + 「すき」の比率。

表1-7 社会観・将来観（小学生、経年比較） (%)

|                          | 1990年 | 2015年 |
|--------------------------|-------|-------|
| いい友だちがいると幸せになれる          | 86.2  | 93.8  |
| いい大学を卒業すると将来、幸せになれる      | 59.3  | 78.1  |
| お金がたくさんあると幸せになれる         | 47.4  | 57.5  |
| 将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい | 59.0  | 70.8  |

注) 「とてもそう思う」 + 「まあそう思う」の比率。

表1-8 勉強の効用観（小学生、経年比較） (%)

|                            | 2006年 | 2015年 |
|----------------------------|-------|-------|
| 一流の会社に入るために                | 80.4  | 85.2  |
| 会社や役所に入っただけでえらくなる（出世する）ために | 69.7  | 79.3  |
| お金持ちになるために                 | 47.8  | 57.8  |

注) 「とても役に立つ」 + 「まあ役に立つ」の比率。

表1-9 成績観・学力観（小学生、経年比較） (%)

|                             | 2001年 | 2006年 | 2015年 |
|-----------------------------|-------|-------|-------|
| できるだけいい高校や大学に入れるよう、成せきを上げたい | 67.0  | 67.8  | 74.6  |
| 学校生活が楽しければ、成せきにはこだわらない      | 35.4  | 30.3  | 21.2  |
| 今は勉強することが一番大切なことだ           | 40.5  | 43.6  | 49.6  |
| そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう | 15.1  | 8.1   | 5.0   |

注) 複数回答。

査と2015年調査では7.6ポイントの増加、「今は勉強することが一番大切なことだ」が40.5%→43.6%→49.6%と9.1ポイントの増加をみている。

以上、冒頭で述べたことの繰り返しになるが、小学校では「確かな学力」の授業やアクティブ・ラーニングの授業が広がり、効果を表している。並行して家庭学習では、学習時間が増加するとともに、質の面では自発的で主体的で計画的になってきている。しかしながら、小学生の社会観・将来観、成績観・学力観、勉強の効用観には競争主義的な傾向や功利主義的な傾向が表れるようになってい

【文献】

文部科学省、2002、「確かな学力向上のためのアピール『学びのすすめ』」。

---

## 4 おわりに

---

最後に、われわれの調査結果が示すところでは、小学生の学習をめぐるのは、「新しい学力観」が導入された1990年（第1回）調査以降の25年間を通じての変化、2001年調査以降の変化、2006年調査以降の変化の3つの変化のポイントないしは流れがあった。2001年調査以降は「確かな学力」（基礎・基本“も”重視）の影響、2006年調査以降は新しい授業方法の影響が読み取れる。

2000年前後の学力論争は重要な議論であったが、それ以前の変化やそれ以降の変化にも着目することで、小学校教育をめぐる大きな潮流や目の鋭意工夫をとらえることができるのではないか。